
Hoffnung und Verzweiflung

エーゲの炎使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hoffnung und Verzweiflung

【Nコード】

N6540S

【作者名】

エーゲの炎使い

【あらすじ】

fortissimoに足を踏み込んだからちょっと冗談で書いてみました。

冗談で書いただけなのであんまり読まないでください

（前書き）

本気でテンプレ&よくあるパターンの展開です。
しかも伏線を全く拾わないという駄作でもあります。

なので決して読まないでください

ごく普通の静かなはずだった町。普通に人が住んでいて、普通にみんな笑い合っていて、普通に幸せだった町。

だけど、目の前でその町は燃えている。跡形もなく、すべてを飲み込むように炎に包まれている。

オレは炎に包まれた家の中で、この町でできた幼馴染を炎から庇うように覆いかぶさっている。

「なんだ、まだ生き残りがいたのか」

不意にそんな不気味な声が聞こえてそっちのほうを向くと、本当に不気味な女がそこにいた。

一瞬オレと同じ生き残りかと思ったが、すぐに違うとわかった。なぜなら、その女はこの炎の中で

火傷をかけらも負っていない。こんな炎の中ならどこかが焦げてても良いはずなのに、服にさえ焦げ目が付いていなかった。

「ア、ア、アンタ、は、何者？」

オレはどもりながら何とかそう聞くことが出来た。

はつきり言っただけの女が怖かった。どうしようもなく怖かった。

異常性？ 違う、目の前にいる女がこの炎を放った張本人だと本能的に理解してしまったから。

「『エーゲの炎』を目の前にして狂ったのか？まあいいや、ここで殺してあげる。お前みたいな小僧が生きたって何の得にもならないからな」

『エーゲの炎』？なんだそれは？
疑問に思ったが、すぐに録でもないことだと理解した。そんな事より、この状況から大切な少女を助ける方法を考えたい。

「走れるか？」

「な、なんとか」

目の前にいる女に聞こえないような声を小さくして話しかけ、小さく顔を縦に振った。

「ならオレが注意を引くからお前はその隙を見て逃げろ」

「で、でも！危険だよ！！」

「大丈夫。オレが強いのは知ってるだろ。だから、お前がいると気になってしょうがないから」

「わかった。でも絶対に帰ってきてね」

彼女は心配そうな顔でそう言っ、オレは何も言わずに笑顔を作った。正直に言えば勝てる自信は砂一粒ほどもなかった。ウサギが、獅子に挑むくらい無謀な行為。だけど、ウサギなりに信念はあつて、しぶとく立ち上がれば数秒だけでも稼げる。

「最後の愛の言葉は終わった？」
プロポーズ

「ええ、お陰様で、ね!!」

不意打ちのように視界外から胴回し回転蹴りを当てようとする。しかし、オレの不意打ちはあっさりと避けられた。だけど次は当てるぜ!!

今の蹴りは避けて貰うためにはなったのだ。先手必勝なんて言葉は相手が強かったら何の意味もない。だから一瞬だけ優位に立てる不意打ちを囫にして、渾身のパンチを放った。

「その程度か？」

「なっ!!?」

しかし、オレの渾身の一撃は平手で受け止められてしまった。それも全く鍛えられていない女の細腕で。

「今度はこっちの番!!」

女は型も何もないまま思いつきり振りかぶってきた。オレは対して威力はないと油断して女の攻撃をガードで受け止めた。

その瞬間――

「なっ!!!!!!」

ガードの上からでも、人間が出せるようなレベルをはるかに超えた衝撃が体を襲ってくる。

その衝撃でガードした腕の骨にひびが入って、後ろに吹っ飛ばされる。

「どうしたの？女だと思って甘く見てた？」

甘く見ていたことは確かなので何も言えずただ自分の唇を噛んだ。クソッ!!ふざけた力を持ちやがって!!これじゃ粘れるかどうか怪しい

「そら、もう一発!!」

女はまたしても素人だと晒しているような大振りのパンチを放つ

てくる。今度は避けようと思って立ち上がろうとすると、殴られた時の衝撃が抜け切れてなくて、たった瞬間に崩れ落ちるように倒れてしまった。

ははは、これで終わったな。

さっきの威力をもう一発食らうと死は免れないから、そこで自分の命は諦めて、命を懸けて逃がすことにした少女の無事を願った。オレが死んだら悲しんでくれるかな？いや、そんな縛り方は嫌だからオレのことは忘れて幸せになってほしいな。

そんな事を考えて自分の死を俯瞰していると奇跡が起こった。

当たる直前で石が飛んできて、女は石に意識を奪われてパンチは逸れてオレの顔を掠める程度で済んだ。その事に生き延びたことを安堵しながら一つの疑問がオレの頭の中を渦巻く。

どうして、石が、飛んできたんだ？

石が普通に飛んでくるわけがない。つまり、誰か投げた者がいるのだ。しかもあんなギリギリのタイミングで飛んでくるのだから、オレを助けたいと想う者が。

嫌な予感を胸に秘めながら石が飛んできた方向を見ると、いた。

「おや、せっかく彼氏が無謀にも命を懸けて時間を稼いできたのに戻って来ちゃうなんて。おバカだね」。まあ後で探しに行く手間が省けたからいいか」

そう、石を投げたのはオレが命を張って逃がそうとした幼馴染の少女だったのだ。彼女の胸にはわざわざ拾ってきたのかたくさんの小石が抱えられている。彼女はその石の一つを掴んでもう一回投げる。高い放物線を描いて石は女の体に直撃した。女はしばらく彼女の精一杯の抵抗を受けたが、ついにじれったくなっただのか彼女の元

へ歩き出そうとする。

「やら、せる、かよ」

ふらふらに動く腕を必死に動かして女の足を掴み、放さないように握り締める。その格好はものすごく無様だが、オレには関係ない。あの娘を守るなら、血反吐を飲もうが泥にまみれようが全く構わなかった。

「あいつは、オレが、守るんだ」

「勇ましいわね。でも、実力が伴っていなかったらウザいだけ」

女は冷たく言い放って手を叩く。すると手の間から炎が吹き出して次第に棒の、いや槍の姿を作って、燃え上がるのをやめた瞬間炎の中から緋色の柄、刃に黒い炎を描いた突撃槍が姿を現す。

「な、にを」

掠れた声でなんとか口にする。女は何も答えず突撃槍を構えて――オレの肩に突き刺した。

「グワァー!!」

息の根を止めてくると思っていたから、予想外の場所から襲ってくる激痛に苦悶の声を漏らした。

その痛みのせいで握る力を弱めてしまった。

手を離そうとするな！！ここで逃がしたら、せっかく命を懸けたのが無駄になる！！

しかし、すぐに自分の命を懸けて逃がした少女のことでカツを入れてまた強く握り締める。

「ウザい」

女はオレの肩に突き刺した突撃槍を捻^{ねじ}り込んで、傷口を抉^{えぐ}る。しかし、オレの心をへし折れるほどの痛みじゃないから、しっかりと女の足を掴み続けた。そして動けない女に向かって幼なじみの少女が石をぶつける。

しばらく意地のぶつかり合いが続いて、女が先に諦めた。

女はオレの体から突撃槍を抜いて――

「さよなら」

オレか、女か、はたまた両方か。そんなつぶやきが聞こえてオレ

は目を瞑り、女はオレの心臓がある場所をめがけて突撃槍を落とすように突いた。

その瞬間服に血が染み渡る感覚がする。激痛、とまでは行かないけど、それなりに痛みが襲ってくる。

これが、”死”なのか。意外と痛みはないんだな。

死んだ自分に諦観を持って、だけど死ぬことより幼なじみを守ることを優先しようと思って目を開いた。

「……な……ん……で……」

目を開くと信じたくない光景があった。たった一言呟くことさえ時間をかける。

その場で繰り広げられている様子は――
女は嘲るように高らかな笑い声をあたりに響かせ、楽しそうに突

撃槍を抜き刺しする。少年は魂が抜けたような茫然自失とした表情で女の足を握ってた手を離した。

そして少女は幼なじみの少年の上から覆い被さって、女が突いた突撃槍を代わりに受けていた。突撃槍は少女の体を貫き、女が何度も刺したり抜いたりするせいで血は止まることを知らずに少女の体から溢れ出して少年の服を深紅に染め、周囲の炎を映す。

冷たい

少年はそう思った。周囲に炎があるのだから普通は「暑い」はずなのに、少年は少女の体に触れてそう思った。すぐに少女を動かさないように起き上がる。

「……麻、……けがは……な……い……?……」

「ない!! なかったからお前も元気で!!!!」

「……ふふっ、……もう……無理だ……よ……じぶ……も……
……生き……られな……い……こと……らい……かるよ……
……」

「諦めるなよ!!!!」

「……麻と……い……っしよに……れて……たの………しかったよ……」

少女はそう言つと力尽きたようにすべての力が消えた。

「おい！　しつかりしろ！！　おい！！！！」

少年は少女の目を開かせようと声を掛けた。しかし、少女が目を開くことはなかった。

少女が完全に息を引き取ったことを見て、女は少年の悲痛な叫びに満面の笑みを浮かべて独り言を呟いた。

「まったく、愚かな娘だよ。自分ひとりだけで逃げれば良かったものを」

「……………よ」

「しかも彼氏はかつこつけて自己犠牲精神満載だったのに」

「……………れよ」

「しかも自分でもかつこつけて効かない攻撃をする。頭にウジでも湧いてるんじゃない？」

「…まれよ」

「あぐく遅いか早いかだけの話なのに自分から死んだ。あんなに笑ったっていうのにまだ笑い足りないんだから笑いを堪えるのに一苦労だったよ」

「黙れと言っている！！！！」

反射的に叫んでオレは女に飛びかかった。
殴られた痛みも、突撃槍に刺された痛みも、炎に焼かれた痛みも、
全く感じなかった。ただ、目の前にいる女を殺したくて総てを忘れ
た。

「意味がないって解らないのね」

女はそう言っで鼻で笑い、オレのパンチを受け止めた。
まだだ！！ まだ、力が足りナイ！！！！

「うおおおおおおおおおおお！！！！！！」

ただひたすらに、がむしゃらに、でたらめに、型も何もあつたも
のじゃない殴り方で腕が壊れるまで何度も殴りつける。インファイ
トのように一方的に殴る。

女は反撃しようと大きく腕を振って殴ることが――

――出来なかった。

少年に当たる前にがむしゃらな拳が内側から当たって女の手が大
きく逸れたから外してしまったのだ。

「（偶然？ どっちでもいいわね）」

女は一瞬逸らされたことを偶然と考え捨てて次の拳を振るった。
しかし、また内側から殴られて逸らされる。

「（ま、まさか！！！）」

女の背筋に戦慄が走って、大して痛くないパンチを受けながら少年から離れようとした。しかし、少年も負けじと足の動きから逃げようとする方向を特定して、連打の嵐を降らせる。

カウンターのようにな少年を攻撃しようとしても、その攻撃も逸らされて当たらない。

「くっ、エーゲの炎！！！」

女は体を炎上させて少年が自分から離れるように促した。しかし

「なっ！！！！！」

少年が殴った場所はおろか、少年の体はエーゲの炎に包まれることはなかった。

「無駄だ！！ アンタの能力はオレの能力には通じない！！！」

そう、少年は生まれながらに持っていた能力を完全に覚醒させた。いままで少年を絶望の淵に追いやった能力は、覚醒すれば目の前の女すら滅ぼせる力を持っていた。ただ、覚醒条件が余りにも非道かった。まさしく、少年を絶望の淵に追いやるためだけに存在するようない力だったのだ。

そして、能力が完全に覚醒した今、能力の本当の使い方、死に方、殺し方、それに関わる知識総てを本能的に理解した。いや、この場合能力が本能的に理解させたと言った方が正しいのかもしれない。

「ふざけるな！！！！ エーゲの炎こそ最強で、最凶のネクスト！！！！ 貴様みたいな餓鬼に消されるはずがない！！！！！」

女は目の前でされた光景が信じられず、泣き喚くように叫びながら少年を焼こうとエーゲの炎を最大火力で、限界まで密度を高めて放つが、やはり少年が燃えることはなかった。

「アイツの苦しみを、ここで晴らす！！！！！」

オレは思いっきり拳を振って女の手から突撃槍を放させた。さっきこの女は『エーゲの炎こそ最強で、最凶のネクスト』と言った。なら、シングは空間から取り出したこの突撃槍だよな！！！！

（後書き）

5 / 2 追記：

感想制限をなくしたので、もし感想若しくはお気に入り登録が5件を超えたら書いてみようと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6540s/>

Hoffnung und Verzweiflung

2011年10月8日12時58分発行